

東洋史研究

第二十五卷 第一號 昭和四十一年六月發行

唐朝創業期の一考察

布 目 潮 風

一 は し が き

二 李淵集團幹部の唐朝創業後の官歴

(一) 大將軍府の本部官の出身者

(二) 大將軍府の左右領大都督府官の出身者

三 唐朝創業期の三省六部の人的構成

(一) 尙書都省 (二) 六部 (三) 門下省 (四) 中書省

四 む す び

一 は し が き

1 昨年私は「李淵集團の構造——唐朝の成立に關する一視角」(立命館文學二四三號、昭和四〇年九月)と題する一文を發表して、唐の高祖李淵が、隋の煬帝の大業十三年(六一七年)七月、太原起義時における李淵集團の解明を試みた。そ

ここではこの起義が、隋朝の重要據點である太原において、隋朝よりこの地方の文武の大權を委任されていた「太原留守」としての李淵の官職が、十二分に利用されたものであることを述べ、その集團の中核は太原留守下の隋の官僚を中心に形成せられたものとした。そしてこれまでは唐朝成立の基盤をいわゆる豪族と考えられたのに對して、それを豪族と考える根據の薄弱であることを論述した。要するに私の前稿においては、唐朝を樹立した李淵は、隋の官僚の地位を基盤として立ち上がり、太原起義時の李淵集團の構造は隋朝の性格と本質的に異ならないものと考えた。

李淵は太原起義後、約四か月で、その年の十一月には隋の西都長安を占領し、翌年五月には唐朝を創立し、同年六月一日には唐朝の主要官僚メンバーの任命を行った。本稿においては、この時點より高祖李淵の在位中の武德九年間（六一八—六二六年）の主要官僚メンバーを考察して、そこから唐朝創業期の性格を探求しようとするものである。そのためには當然まず李淵集團のメンバーがどのように唐朝にもちこまれ、また李淵集團以外で唐朝官僚の主要メンバーとなったものはどのような性格のものかを検討することになる。

また私は終戦後間もないころ本誌上に「唐初の貴族」（東洋史研究第十卷第三號、昭和二十三年七月）と題する拙稿の登載を許され、唐朝成立の基盤に關する卑見を開陳した。しかしこれは故内藤湖南博士が、「貴族政治は、支那では、六朝から唐の中頃までを最も盛んな時代とした」（『中國近世史』序）と言われたことに對して、南北朝の貴族と唐朝の貴族はその本質を異にしていることを述べようとしたものであった。この論文は、今から考えると、内藤博士の説に對する反駁のみに急で、充分な準備を缺いた粗雑な點が多かった。またその後において、陳寅恪氏の「唐代政治史述論稿」を讀むに及んで、ますますその論の未熟さを知った。しかし發表後に、拙論に對する激勵もあり、批判もあった。しかし私は今日においても、「唐初の貴族」はその論證の過程における不備は認めつつも、唐朝創業期の性格についての基本的な考えはなお維持すべき點があると考え、本稿はこの舊稿の補正の意味を含めてゐる。しかしこの「唐初の貴族」は、唐の高祖朝より則天武后の時代にまで及んでおり、とくに高祖・太宗朝は一括して述べてゐる。しかし現在ではこのような概観で

はもはや批判に耐え得るものとはならないので、本稿においては、そのうち高祖の武徳時代に限定して述べ、太宗朝および則天武后の時代については、稿を改めて述べることにする。

なお「唐初の貴族」においては、その題名に示されているように、「貴族」という概念の捕え方に問題の主要な契機があった。しかし貴族という言葉は、中國史においては、きわめて曖昧な概念であると考えるに至ったので、本稿においては、貴族という言葉はいっさい用いないこととした。また舊稿では、宰相（主として三省の長官がこれにあたる）についてのみ述べているが、今回は三省六部の長官・次官まで取り上げる範囲を擴大して、論の緻密化をはかった。

なお本稿の執筆にあたって、嚴耕望氏の「唐僕尚丞郎表」（以下簡稱「嚴表」數字は頁数を示す）（中華民國四五年、臺灣中央研究院歷史語言研究所刊）に多くの恩恵を受けた。氏の勞作がなかったならば、本稿はきわめて困難なものとなつたと思う。ここに厚く謝意を表しておきたい。

二 李淵集團幹部の唐朝創業後の官歴

李淵集團幹部一覽表として、拙稿「李淵集團の構造」（以下において「李淵集團」と略稱を用いる）表(一)一四頁において挙げたのは次の三二名である。

(1)	裴寂	(2)	劉文靜	(3)	殷嶠	(4)	劉政會	(5)	崔善爲	(6)	張道源	(7)	唐儉
(8)	溫大雅	(9)	溫大有	(10)	姜蕃	(11)	武士護	(12)	劉瞻	(13)	權弘壽	(14)	盧階
(15)	田德平												
(16)	陳延壽	(17)	紫紹	(18)	李思行	(19)	姜寶誼	(20)	趙文恪	(21)	李高遷	(22)	長孫順德
(23)	劉弘基	(24)	竇琮	(25)	王長諧	(26)	楊毛	(27)	段志玄	(28)	張平高	(29)	許世緒
(30)	劉世龍	(31)	錢九隴	(32)	樊興								

このうち(4)田德平までは、李淵太原起義時の大將軍府の文官である長史・司馬・掾・屬・各參軍の地位にあったものであり、(4)陳延壽より(9)許世緒までは、李淵の長子建成の率いる左領軍大都督、次子世民の率いる右領軍大都督の下で實戰指揮に當つた長史・統軍・軍頭の官に當つたものである。この(4)田德平までと、(4)陳延壽以下とは、唐朝創業後の官歴にはっきりと區別が生じている。すなわち前者は主として三省六部・九寺の長官・次官に榮進したのに對して、後者は主として武官系統の大官に榮進したことが判明するので、以下にそのことを具體的に述べることにする。

(一) 大將軍府の本部官 (長史・司馬・掾・屬・各參軍) 出身者

李淵は大業十三年(六一七年)七月癸丑(五日)に太原を進發し、早くもその年の十一月丙辰(九日)に長安を占領し、癸亥(十六日)には、隋の代王侑を立てて天子(恭帝)とし、煬帝を太上皇とし、義寧と改元し、翌甲子(十七日)に、李淵は假黃鉞・使持節・大都督内外諸軍事・尚書令・大丞相・唐王に任ぜられ(隋書五)、同月丙寅(十九日)には、丞相府に、長史・司錄以下の官屬が置かれたことが見える(新舊唐書本紀)。丞相府には、大將軍府に見える長史・司馬以下の官屬のほか、後述の如く、司錄(竇威)・主簿(陳叔達)、という官名も現われるから、丞相府は大將軍府の組織を擴充して作つたものと見てよいし、その官員も大將軍府官よりそのまま横すべりしたものが多かったと思う。以下においては、李淵集團の幹部がその組織である大將軍府官より、丞相府官をへて、唐朝創業時、それ以降とどのような官歴を示すかを追跡してみようと思う。(翌武徳元年三月戊辰に丞相府を相國府と改む)

(1) 裴寂 舊五 新八 (「舊」は舊唐書、「新」は新唐書の略、數字は卷數を示す)

舊傳によれば、裴寂は、隋の晉陽宮副監より、太原起義の元謀として、大將軍府官最高の長史より、丞相府長史に任ぜられ、ついで翌武徳元年五月、李淵の唐帝即位には勸進の任に當り、翌六月甲戌朔の諸官任命の時、右僕射に任ぜられた。新唐書本紀には「右僕射知政事」とあり、知政事は、のちの參知政事・參預朝政の如く、宰相の職を行つたものと解せられる。武徳二年には、劉武周を討つて、宋金剛に敗れたこともあったが、武徳六年四月癸酉には、尚書左僕射に進ん

だ（舊紀）。武德九年正月丙寅には、最高位の一つである三公の司空に進んだ。太宗世民の即位後は、太宗と合わず、貞觀二年（六二八年）、年六十にて薨じた。武徳中には、律令の纂定に預り、高祖の信頼は厚く、高祖は「我をして此に至らしめしは公の力なり」と曰い、また「言従わざる無く、呼びて裴監と爲して名をいわず、當朝の貴戚、親禮すること、與に比を爲す莫し」（舊傳）とあり、高祖朝は最高の地位、待遇を受けた。

なお裴寂の家柄については、私と矢野主税氏（『唐初の貴族政治について』東方學第九輯）との間に見解の相違があるが、系譜の點から言えは矢野説の如くであろうが、矢野氏も擧げておられるように、當時の裴寂の家は「卑賤之極」とか、「家貧無以自業」という没落した境遇にあり、これを貴族とすれば、天下の家は系譜さえあればすべて貴族となってしまうであろう。

(2) 劉文靜 舊五 新八

舊傳によれば、劉文靜は、隋の晉陽令より、李淵の大將軍府司馬となつた太原元謀の功臣で、丞相府ではやはり司馬となつた。武徳元年六月一日には納言となつた（舊紀）。納言は武徳三年三月己卯に侍中と改められた（舊紀）。門下省の長官である。納言の官にあって、隋の開皇律令を基にした唐朝の律令の纂定に裴寂と共に與つた。武徳元年七月には、世民に従つて薛舉と戦つて敗れ、除名された。しかしまもなくその八月には薛舉死し、その子の薛仁果をまた世民に従つて平げ、その功で民部尚書（後の戸部尚書）、領陝東道行臺左僕射となつた。武徳二年になると、裴寂と功を争い、その年九月辛未殺された（新紀）。時に年五十二であつた。

(3) 殷嶠（字は開山）舊五 新九

殷嶠は隋の石艾縣長（新紀には大谷長）より、李淵の大將軍府掾となり（舊紀）、長安に入つて、丞相府掾となつた。武徳元年六月一日に、吏部侍郎となり（通鑑）、薛舉討伐に敗れて除名されたが、まもなく薛仁果を平げて官爵を復され、兼陝東道行臺兵部尚書、さらに同吏部尚書に遷つた。また王世充を平げ、劉黑闥を征し、道に卒した。武徳五年頃と推定

される(舊傳)。

(4) 劉政會 舊五
新九

舊傳によれば、隋の太原鷹揚府司馬であったが、太原留守李淵の麾下に隸し、太原起義に功あり、大將軍府戸曹參軍(舊紀には大將軍府屬)となり、長安に入り、丞相府掾となり、武徳元年、衛尉少卿(衛尉寺の次官)・留守太原となった。劉武周が太原に進寇し、その捕虜となったが、賊中より形勢を密奏し、賊が平定され、官爵を復され、のち武徳中に刑部尚書・光祿卿を歴任した。太宗世民の即位後は洪州都督となり、貞觀九年に卒した。

(5) 崔善爲 舊一九
新九

舊傳によれば、隋の樓煩郡司戸書佐(時に太守は李淵で、その知遇を受けた)より、大將軍府司戸參軍となった。武徳元年、内史舍人(内史令、のちの中書令下の實力者)となり、まもなく尙書左丞に遷り、武徳五年十二月には大理卿になっている(嚴表四〇頁)。貞觀初め、陝州刺史となり、秦州刺史で卒した。司農卿になったことも本傳に見えるが、いつのことか判明しない。

(6) 張道源 舊一八
新一九

新傳によれば、隋代では監察御史に至ったが、隋政亂れ、郷里に引退していた。李淵起義の時、大將軍府戸曹參軍となった。李淵の長安に進撃中、太原を守り、長安平定後、山東撫慰の任に當り、功績が多かった。のち淮安王神通(系圖(3)唐宗室略系、一八頁参照)に従って竇建徳を討って捕えられたが、賊平ぎ、大理卿を拜した。舊傳によれば、ついで太僕卿になり、相州都督(新傳は綿州刺史)で、武徳七年に卒した。死して貨産なく、高祖より帛三百段をとくに賜った。

(7) 唐儉 舊五
新八

舊傳によれば、祖父の豈は北齊の尙書左僕射であり、父の鑿(隋の戎州刺史)が李淵と同じ禁衛に在ったことから、世民と周密となり、世民に天下圖るべきを説き、大將軍府記室參軍となった。世民が渭北道行軍元帥となった時、その下で

司馬となった。李淵長安を平定し、のち相國府記室參軍となった。武德元年、内史舍人、ついで中書侍郎、特に散騎常侍を加えられた。このころ劉武周を討つて捕虜となったが、武周北走の時、その府庫を封じて世民を待ち、高祖李淵はそれを嘉みして、舊官を復し、并州道安撫大使となり、選んで禮部尚書・天策府長史・兼檢校黃門侍郎となった。これを嚴表八一頁は「武德四年或稍後」としている。ついで遂州都督に轉じた。貞觀初め、突厥に使し、隋の蕭后と共に還り、民部尚書を授けられた。嚴表七六二頁はこれを貞觀九・十年のこととしている。高宗の永徽初め致仕し、顯慶元年（六五六年）卒し、年七十八であった。その子の善識（新八義識に作る）は太宗の娘の豫章公主に尙して（婿となること）駙馬都尉となった。

(8) 溫大雅 舊一六 新九

舊傳によれば、溫大雅は、隋朝では東宮學士・長安縣尉に至ったが、父の喪で職を去った。李淵起義し、大將軍府記室參軍となった。専ら文翰を掌り、禪代の際には禮儀を參定し、武德元年、黃門侍郎となった。ついで工部侍郎（新傳）に轉じ（嚴表一〇頁は武德中末葉としている）、陝東道大行臺工部尚書を拜した。太宗即位し、禮部尚書に轉じたが、歳餘にして卒した。その撰した「大唐創業起居注」は唐朝創業期の好史料として名高い。

(9) 溫大有 舊一六 新九

溫大有は溫大雅の弟で、舊傳によれば、隋の仁壽中、李綱（後述、三、禮部尚書の項）之を表薦し、羽騎尉となったが、父の喪のため郷里に歸った。李淵起義し、太原令となり、長安に進撃中に、本官を以て攝大將軍府記室參軍となり、兄大雅と共に機密を掌った。武德元年、中書侍郎となったが、その年卒した。

(10) 姜蒼 舊一五 新九

舊傳によれば、姜蒼は、隋の大業末の晉陽縣長で、太原留守の李淵が深く之を器とし、大將軍府司功參軍となった。長安平定後、相國府兵曹參軍（新傳は胄曹參軍）となり、唐朝創業後は薛舉を討ち、還って員外散騎常侍となった。薛仁果

を平げ、秦州刺史となり、隴州刺史に轉じ、武德七年、老疾を以て職を去り、貞觀元年卒した。

(11) 武士護 舊五八 新二〇

武士護は則天武后の父である。舊傳によれば、李淵が太原留守の時、行軍司鎧となり、李淵に起兵を勧め、大將軍府鎧曹參軍となった。しかし起義の進撃に積極的に参加した史料はない。舊唐書劉文靜傳には、武德元年（劉文靜納言の時）、「庫部郎中武士護約免一死。」とあり、庫部郎中であつた。ついで工部尙書になつた。嚴表一〇では、これを武德三年とされている。さらに利州都督となり、また荊州都督となり、貞觀九年卒した。^④

(12) 劉瞻 (13) 權弘壽 (14) 盧階 (15) 田德平

この四人はいずれも唐朝創業後の官職不明である。

(二) 大將軍府の左右領大都督府官の出身者

(16) 陳延壽 唐朝創業後の官職不明

(17) 柴紹 舊五八 新九〇

柴紹は高祖李淵の三女、平陽公主（新三八）の夫である。舊傳によれば、隋の元德太子（隋書九、煬帝の長子）の千牛備身であつた。李淵の起義を聞き、長安より太原に趣き、右領軍大都督府長史となり、太原進發後、馬軍總管を兼領した。李淵長安に入り、武德元年、左翊衛大將軍に至つた。この時ははまだ唐の十二衛の制が定まっていなから、隋官としての左翊衛の長官の左翊衛大將軍をそのまま用いたのであろう。^⑤ なお舊唐書劉文靜傳には、武德元年のこととして、「右屯衛大將軍柴紹約免一死。」とあり、この記事によれば右屯衛大將軍も歴任していることがわかる。ついで世民に従つて、薛舉を平げ、宋金剛を破り、攻めて王世充を平げ、竇建德を擒にする嚇々たる武功を擧げ、右驍衛大將軍に轉じ、吐谷渾・黨項を討つた。なお冊府元龜九外臣部備禦三に、武德八年五月のこととして、十二軍（十二衛とは異なる、詳しくは唐長孺「唐書兵志箋正」七頁参照）を復したことを述べて、「岐州刺史柴紹爲平道將軍」とあり、岐州刺史・平道將軍の官に

あったことも判明する。貞觀元年、右衛大將軍に遷り、同二年、梁師都を平げ、左衛大將軍に轉じ、出でて華州刺史となり、同七年、鎮軍大將軍（武散官從二品）を加えられ、行右驍衛大將軍となり、同十二年卒した。岐州刺史・華州刺史のほか唐朝武官の最高職を歴任した。

(18) 李思行 舊五 新八
七五

舊傳によれば、李思行は仇を太原に避けていて、大將軍府の左三統軍となり、宋老生を破り、長安を平定し、のち嘉州刺史を授けられ、高宗の永徽初め卒した。

(19) 姜寶誼 新八

新傳によれば、隋の鷹揚郎將の時、府兵を領して、李淵に從つて盜を督し、李淵起義の時、左統軍となった。唐朝創業後は右武衛大將軍となり、劉武周を討つて賊に捕えられたが逃歸し、また裴寂と宋金剛を拒いで捕えられ、逃亡を謀つて殺された（舊紀に武德二年九月丁丑とある）。

(20) 趙文恪 舊五 新八
七五

舊傳によれば、趙文恪は隋末に鷹揚府司馬となり、李淵起義の時、右三統軍となった。武德二年、都水監となった。宋金剛の太原に寇した時、太原留守の元吉（李淵の第三子）は文恪に步騎千餘を率いて李仲文を助けさせたが、太原が賊に陥落し（舊紀、武德二年九月丁丑）、文恪は城を棄てて遁走し、この罪で死を賜った。

(21) 李高遷 舊五 新八
七五

舊傳によれば、隋末に太原に客遊し、太原で李淵に應じなかつた高君雅、王威を擒にするのに功あり、起義の時、右三統軍となった。長安を圍んで力戦し、功最となり、累遷して左武衛大將軍・檢校西麟州刺史となった。武德の初め、突厥が馬邑に寇した時、朔州總管の高滿政を助けたが、賊兵の盛んなのを見て遁れ、坐して除名され邊に徙されたが、後ち佐命の功を以て、陵州刺史（新傳は資州刺史）となり、高宗の永徽五年卒した。

②長孫順徳 舊八 新一〇

系圖(1)長孫氏



長孫順徳と太宗の文徳長孫皇后との關係は新唐書宰相世系表^{七二}によ

れば、上の如くである。長孫氏がもと拓拔氏という胡姓であることは姚徽元氏の「北朝胡姓考」(一二頁)に見える。舊傳によれば、順徳は隋の右勳衛に仕えたが、高句麗遠征の時、太原に逃匿し、李淵・世民に親しみ、起義時には劉弘基と募兵に當り、萬餘人を集め、大將軍府建ち、統軍となった。長安への進撃に活躍し、李淵即位し、左驍衛大將軍に至った。冊府元龜^{九九}には、武徳七年に十二軍の内の奇官將軍になったことが見える。玄武門の變には、世民側で奮戦し、世民踐祚し、特に宮女を賜って常に内省に宿した。しかし後に奴を監して人の餽絹を受け、事發覺したが、外戚と元勳のため太宗世民はかえって絹數十疋を賜ってその心を恥じさせた。ついで李孝常と交通するに坐し、除名せられたが(貞觀元年十二月)、歲餘にして復官し、澤州刺史となり、良牧と稱せられたが、また事に坐して免ぜられ、疾を發して卒した。順徳は太宗朝は外戚に連っているから、他の李淵集團の人々と同一には考えられない。

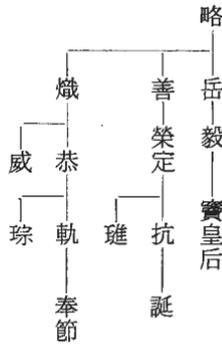
③劉弘基 舊五 新九

舊傳によれば、隋朝では父蔭を以て右勳侍(註⑥参照)となっていたが、煬帝の高句麗遠征の時、太原に亡命し、李淵の下に至り、世民の親禮を受け、大將軍府の統軍となった(新・舊紀)。李淵の長安への進撃中奮戦し、渭北道大使となり、便宜従事を得、殷驍(開山)がその副となり、長安を破って功第一となった。ついで世民に従って薛舉を討ち、東都を經略し、武徳元年、右驍衛大將軍となった。ついでまた薛舉を討ち、矢盡きて捕虜となったが、高祖より臨難不屈を嘉せられた。唐側が薛仁果を平定した時還り、その官爵を復された。また宋金剛を伐って捕虜となったが逃歸した。また劉黑闥を撃つて歸り、秉鉞將軍を授けられたとあるが、これは冊府元龜^{九九}の武徳七年五月に十二軍を復した記事に、

「右驍衛將軍劉弘基爲井鉞將軍」とある井鉞將軍(唐長孺「唐書兵志箋正」五頁參照)に當り、右驍衛將軍は右驍衛大將軍の誤りであろう。また淮安王神通に副として突厥の防備に當った。太宗即位後も顧待ますます隆かったが、李孝常の謀逆(貞觀元年十二月)に坐して除名された。しかし歳餘にして起つて易州刺史、ついで衛尉卿に至った。貞觀九年には夔國公、世襲朗州刺史となつたが、年老を以て骸骨を乞うも許されず、輔國大將軍(正二品)を授けられた。太宗の高句麗遠征(貞觀十八年)には前軍大總管となつて力戦し、高宗の永徽元年、年六十九で卒した。劉弘基は太原元謀以來、太宗の貞觀末年まで引續き仕官した珍しい例である。

②寶琮 舊六 新九

系圖(2)寶氏



新唐書^{七一}下、宰相世系表によれば、寶琮と高祖李淵の太穆寶皇后との關係は上の系圖の通りである。なお寶氏は北朝の胡姓「紇豆陵氏」を改められたものである(姚徵元「北朝胡姓考」一七五頁)。寶琮は、舊傳によれば、隋の左親衛(註⑥參照)であつたが、大業末に太原に亡命し、李淵の下に依つた。大將軍府の統軍となり、長安に進撃中奮戦し、隋の河陽都尉の獨孤武の歸順に際して應接したが、遲留して進まず、武が殺され、是に坐して除名され、本官を以て檢校晉州總管となり、ついで隱太子建成に從つて劉黑闥を平げ、未だ幾くもなくして卒した。

③王長諧

大唐創業起居注一の大將軍府の建つた時の條に、「以鷹揚王長階等分爲左右統軍」とあり、新紀には「王長諧爲統軍」とあり、新紀の長諧に從つた。鷹揚は鷹揚府の長官である鷹揚郎將の略である(李淵集團二七頁)。この人については新舊唐書共に列傳がない。しかし冊府元龜^{九九}の武徳八年に十二軍を復活した記事に「左武侯將軍王長諧爲天紀將軍」とあり、

⑳楊(陽)毛(屯)

創業注一の大將軍府の建った時の條に「鷹揚楊毛等分爲左右統軍」とあり、通鑑一八、冊府元龜三四には「陽屯」とあるが、陽屯は楊毛の誤りとしておく。楊毛は隋の鷹揚郎將より、大將軍府の統軍となった。前掲の冊府元龜に「右監門衛大將軍楊毛爲折威將軍。」とあり、武徳中に、右監門衛大將軍、折威將軍を歴任した。

㉑段志玄 舊六 新八

舊傳によれば、段志玄は父に従って太原に在り、世民に知られ、大將軍府下の右領大都督府軍頭となった。長安への進撃に奮戦し、唐朝創業後も王世充を討ち、竇建徳を討ち、東都平定の功多く、秦王(世民)府右二護軍となった。玄武門の變の時、建成・元吉側も金帛を以て志玄を誘ったが納めず、世民側に加った。太宗世民即位し、累遷して左驍衛大將軍に至った。貞觀十一年、世封金州刺史となり、同十二年、右衛大將軍を拜し、同十四年、鎮軍大將軍(武散官從二品)を加えられ、同十七年卒した。

㉒張平高 舊七 新八

舊傳によれば、隋末に鷹揚府校尉となり太原に戍し、李淵に識られ、起義の時、軍頭となった。長安を平定し、左領軍將軍を授けられた。貞觀初め、丹州刺史となった。事に坐して免ぜられたが、令して右光祿大夫を以て第に還らしめ、卒した。

㉓許世緒 舊五 新八

舊傳によれば、隋の犬養末、鷹揚府司馬となっていた。李淵に起義を勸めて認められた。起義後、右一府司馬となった。武徳中、蔡州刺史に除せられて、卒した。

㉔劉世龍(義節) 舊七 新八

舊傳によれば、隋の大業末に晉陽郷長であった。裴寂の勧めで李淵に近づき、起義直前に李淵に附かなかつた王威・高君雅のことを李淵に告げ、功があつた。長安を平定し、累轉して鴻臚卿に至つた。府庫の充實に力を盡し、太府卿に遷り、貞觀初め、少府監に轉じ、罪を以て嶺南に配流され、ついで欽州別駕を授けられて卒した。

③① 錢九隴 舊五 新八

舊傳によれば、錢九隴はもと李淵の家の隸人で、騎射を善くし、李淵に愛され、起義の時に軍功を立て、長安を平定し、左監門郎將を拜した。ついで薛仁果・劉武周を平げ、戦功を以て、右武衛將軍を授けられた。また世民に従つて寶建德を擒獲し、王世充を平げ、隱太子建成に従つて劉黑闥を討つて破り、武德八年五月に十二軍を復した時、苑遊將軍となつた(冊府元龜九〇)。貞觀初め、眉州刺史となり、再遷して右監門大將軍に至り、貞觀十二年卒した。隸人より大將軍に榮進したことが著しい特色として注目せられる。

③② 樊興 舊五 新八

舊傳によれば、樊興も前述の錢九隴と同じく、李淵の家の隸人であつた。李淵に従つて長安を平げ、右監門將軍に除せられ、また世民に従つて薛舉を破り、王世充・竇建德を平げ、戦功があつた。ついで事に坐し爵を削られた。貞觀六年、陵州の獠を討ち、左驍衛將軍を拜し、また李靖に従つて吐谷渾を撃ち、赤水道行軍總管となり、軍律に坐したが、勳を以て死を減ぜられ、久しくして左監門大將軍を拜した。太宗の高句麗遠征の時、房玄齡に副として留守京師となつた。また檢校右武衛將軍となり、永徽初め卒した。

錢九隴と共に二人も隸人出身者が大將軍に榮進したことは、良賤間の身分差にこだわらなかつたことを唐朝創業期の一特色としてあげることができると思う。唐朝の繁榮の背景を階級矛盾の緩和という語で表現される場合は、この錢九隴・樊興こそ象徴的存在といふことができよう。

以上、李淵集團幹部が唐朝創業後において、どのような官職を歴任したかの追跡調査を試みたが、その結果から観取される傾向は次の如くである。

①(一)のグループ、すなわち大將軍府の長史・司馬・掾・屬・各參軍であつたもの十五名中、唐朝創業後の官職不明の四名と、張道源(大理卿・太僕卿)・姜蒼(員外散騎常侍・隴州刺史)を除き、残りの裴寂(右僕射・左僕射)、劉文靜(納言・民(戶)部尚書)、殷嶠(吏部侍郎)、劉政會(刑部尚書)、崔善爲(尚書左丞)、唐儉(中書侍郎・禮部尚書)、溫大雅(黃門侍郎・工部尚書・禮部尚書)、溫大有(中書侍郎)、武士護(工部尚書)の九名はいずれも三省六部の長官・次官に榮進している。

②(二)のグループ、すなわち大將軍府の左右領大都督府下にあつたもの十七名中、唐朝創業後の官職不明の陳延壽を除き、柴紹(右翊衛大將軍・右驍衛大將軍・左衛大將軍)、姜寶誼(右武衛大將軍)、李高遷(左武衛大將軍)、長孫順德(左驍衛大將軍)、劉弘基(右驍衛大將軍)、竇琮(右屯衛大將軍・右領軍大將軍)、王長諧(左武候將軍)、楊毛(右監門衛大將軍)、段志玄(左驍衛大將軍・右衛大將軍)、張平高(左領軍將軍)、錢九隴(右監門大將軍)、樊興(左監門大將軍)の十二名は十二衛の大將軍・將軍に歴任している。(唐初では十二衛の制は未だ整備されていないが、その間は隋制の十二衛の官職名がそのまま用いられていたと考えている。)残りの四名中、李思行(嘉州刺史)、許世緒(蔡州刺史)は刺史に、趙文恪は五監の一の長官である都水監に、劉世龍は九寺の長官、鴻臚卿・太府卿に榮進している。

③以上を総合すると、大將軍府の文官(長史・司馬・掾・屬・參軍)は主として三省六部の長官・次官に榮進し、大將軍府下の左右領大都督に屬する武官系統の者は、唐朝の軍事面を擔當する十二衛の大將軍・將軍に進んでおり、李淵集團は唐室創業後も唐朝政權の文武の中核的存在となつていったことがわかる。

④以上述べたように、李淵集團が唐室創業後もその中核的存在であつたことは、高祖李淵の在世中である武徳年間に限り、貞觀年間になると、ほとんど活躍を見せなくなり、なお官にある者もたいてい都督・刺史の地方官が多く、もはや李

淵集團の幹部は貞觀年間では唐朝の中核より去っている。これには李淵集團幹部の年齢の問題も考慮に入れねばならないが、貞觀時代はすでに李淵集團幹部が唐朝の中核となる時代とは別個の性格を考えねばならない。

しかし唐朝は李淵集團幹部の人のみよって構成せられていたのではないこと勿論であるが、次には唐朝創業期の中核メンバー（三省六部の長官次官）中で李淵集團の幹部以外にどのような人物が参劃していたかを調べて、この面から唐朝創業期の性格を進めたい。

三 唐朝創業期の三省六部の人的構成 — 長官・次官を中心として

李淵集團幹部の唐朝創業後の官歴は二において見た如くであるが、これ以外に唐朝創業期（高祖李淵の武徳中、嚴密には武徳九年六月四日の玄武門の變まで）にどのような人々が高官に就任したか。ここで高官とは三省（尙書・中書・門下）六部（吏戸禮兵刑工）の長官・次官を指すものとする。三省が唐朝の中心官制であることはここに改めて説くまでもない。

李淵は武徳元年（六一八年）五月甲子（二十日）に唐朝の皇帝に即位した。そして翌六月甲戌朔に諸大官を任命したことは、新・舊唐書の本紀等に見えるが、資治通鑑^{一八}がもつとも詳細なので、以下に通鑑の記事を掲げる。

武徳元年六月甲戌朔。以趙公世民爲尙書令。黃臺公瑒爲刑部侍郎。相國府長史裴寂爲右僕射知政事。司馬劉文靜爲納言。司錄竇威爲內史令。李綱爲禮部尙書參掌選事。掾殷開山爲吏部侍郎。屬趙慈景爲兵部侍郎。韋義節爲禮部侍郎。主簿陳叔達・博陵崔民幹並爲黃門侍郎。唐儉爲內史侍郎。錄事參軍裴晞爲尙書右丞。以隋民部尙書蕭瑀爲內史令。禮部尙書竇璠爲戸部尙書。蔣公屈突通爲兵部尙書。長安令獨孤懷恩爲工部尙書。瑗上之從子。懷恩舅子也。

ここに示された人々のほか嚴耕望氏の「唐僕尙丞郎表」において考證してあげられたうち、武徳九年六月庚申（四日）の玄武門の變より以前に就任した尙書左右僕射・左右丞・六部の尙書・侍郎および筆者の調べた門下省の侍中（納言）・

以下においては、表(一)に◎印を附した李淵集團の幹部はすでに前節において唐朝創業後の官歴を述べたので、ここではそれ以外の人々について、その唐朝歸降の状況、およびその後の官歴を見てゆくこととする。

(一) 尚書都省

左右僕射 裴寂(前述二の(1))

右僕射 蕭瑀 舊六 新一〇

舊傳によれば、蕭瑀は、その高祖が南朝梁の武帝(蕭衍、梁書一)、曾祖が昭明太子(蕭統、梁書八)、祖の察(周書四、察を督に作る)は後梁(北周、隋の保護國)の宣帝(周書八)、父の麟(周書八)は後梁の明帝であり、姉は隋の煬帝の蕭皇后(隋書三)という南朝皇帝の末裔の家に生れた。煬帝が太子となった時、太子右千牛となり、煬帝踐祚して、尚衣奉御・檢校左翊衛鷹揚郎將となった。やがて内史侍郎となり、皇后の弟の故を以て、機務を委ねられたが、のち旨に忤い疎斥され、河池郡守となっていた。李淵は長安を平定するや、瑀を招いて民部尚書とした。武徳元年六月一日に内史令となった(舊傳の武徳五年は誤り)。高祖李淵は諸政務を瑀に委ねていた。また瑀は高祖李淵の母方の獨孤氏(獨孤信の娘は北周明帝、隋の文帝の皇后、唐の高祖李淵の母)の婿で、蕭郎と呼ばれていた。ついで右僕射となった(舊紀、武徳六年四月癸酉)が、あまり評判はよくなかった。時の中書令、封倫(字は德彝)(後述)は瑀の推薦によるものであった。太宗世民即位し、尚書左僕射となったが、時の右僕射封倫と合わず、また房玄齡・杜如晦とも合わず、特進太子少師となり、實權を奪われた。しかしまもなく尚書左僕射に再び歸り咲いたが(貞觀元年六月壬辰)、しかしその年十二月、同じく南朝出身の陳叔達(後述、侍中)と太宗の前で争い、不敬を以て免ぜられた。歳餘にして晉州都督、その明年、左光祿大夫・兼領御史大夫となり、宰臣と朝政に参議したが、房玄齡らと合わず、怏々としており、以後、太子少傅、特進行太常卿、貞觀八年には、河南道巡察使等を歴任した。貞觀十七年、晉王治(後の高宗)皇太子となり、瑀は太子太保・知政事となった。貞觀二十一年、七十四歳で薨じた。子の銳は太宗の娘の襄城公主(新三)に尚し、太常卿・汾州刺史に至つ

北郡王城。武德中。爲尙書左丞。例王終始州刺史。」とあり、嚴表^{四〇}に従い、新傳の「尙書左丞」に従っておく。城のその他のこと不明である。

右丞 裴晞

前掲（一五頁）通鑑の録事參軍は相國府のことであろう。裴晞の官職を普通は「尙書左丞」に作るが、四部叢刊本通鑑（滄芬樓藏宋刊本）は「尙書右丞」に作り、嚴表^{四五}に従い、「右丞」に従う。裴晞は兩唐書に本傳なく、これ以外の傳記、官歴不明である。

(二) 六部

吏部尙書 李綱（後述）

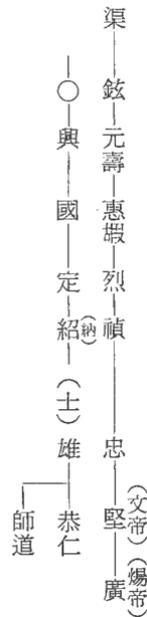
前掲通鑑に「李綱爲禮部尙書參掌選事」とあり、參掌選事は吏部尙書のことを兼ねて掌ることと考えられる。武德元年六月一日に正式に吏部尙書に任命された人が見えないこともこの理解を助ける。李綱についての詳細は本官の禮部尙書の所で述べる。

吏部尙書 封倫 舊^三六一〇 新一〇

封倫は字を德彝と言ひ、字で呼ばれることが多い。舊傳によれば、祖父の隆之は北齊の太子太保、父の子繡は隋の通州刺史であつた。倫は隋の開皇末に、楊素の下で行軍記室・土木監を勤め、文帝より、内史舍人に拔擢された。大業中は虞世基に諂順し、隋政の崩壞に加擔した。煬帝弒逆後、宇文化及の内史令になつた。しかし化及の勢力日に縮まるのを見て、化及の弟の士及と共に李淵の下に來降した。李淵は前代の舊臣を以て内史舍人とし、ついて内史侍郎に遷つた。世民に従つて王世充を討つた。武德六年、本官のまま檢校吏部尙書となり、同八年、中書令となつた。太宗世民嗣位し、右僕射となつたが、左僕射の蕭瑀と合わず（前述）、貞觀元年、年六十で薨じた。子の言道は高祖の娘の淮南公主に尙し（新八公主列傳は封道言に作る）、官は宋州刺史に至つた。

吏部尚書 楊恭仁 舊二 新一〇

系圖(4)楊氏



新唐書^{七一}宰相世系表によれば、隋室と楊恭仁の關

係は上圖の如くで、血縁關係は薄い。恭仁の父は隋の

觀德王雄(隋書^四)である。舊傳によれば、恭仁は隋

の文帝の仁壽中に甘州刺史となり、煬帝の大業初め、

吏部侍郎となり、楊玄感の叛亂(大業九年)の時には隋

側で奮戦し、このころ賄賂往行の中にあつて獨り雅正を守つた。出でて河南道大使となつて盜賊を討捕したが、朱粲に敗

れ、江都に至り、宇文文化及の煬帝弑逆後、その吏部尚書となつた。化及に隨い河北に至り、魏徵に下り、長安に送られ

た。高祖李淵は恭仁を禮遇し、黃門侍郎とし、ついで涼州總管となり、邊事にすぐれた才能を發揮した。まもなく遙授納

言となり、突厥の頡利可汗を禦ぎ、瓜州刺史の賀拔威の叛亂を平げ、吏部尚書・兼中書令(新傳)を拜した(嚴表^八は武

德六年四月二十八日としてゐる)。ついで左衛大將軍・鼓旗將軍(武德八年五月、册府元龜^{九九})となつた。貞觀初め、雍

州牧等を拜し、同五年に洛州都督となり、同十三年卒した。弟の師道(後述)は高祖の娘の桂陽(長廣)公主に尙し、從

姪女が巢刺王元吉(李淵の第四子)の妃となり、弟の續の子の思訓(新^八三公主列傳は思敬に作る)は、高祖の娘の安平公

主に尙するなど、唐室と多く連姻した。

吏部侍郎 殷嶠(字は開山)(前述二の③)

吏部侍郎 楊師道 舊二 新一〇

楊師道は楊恭仁(前述)の弟である(系圖(4)楊氏參照)。舊傳によれば、隋末に洛陽より唐に歸投し、備身左右となつ

た。高祖李淵の娘の桂陽(長廣)(新^三)公主は初め趙慈景(後述)に嫁したが、武德元年十一月、趙慈景の戦死後、師

道に嫁した。そのため吏部侍郎・太常卿を拜した。貞觀七年に侍中、同十三年に中書令、ついで吏部尚書、高句麗遠征の

時、攝中書令、還って工部尙書に貶せられ、ついで太常卿に轉じ、同二十一年卒した。子の豫之は巢刺王元吉の娘の壽春縣主に尙したが、母の喪中に、高祖の娘の永嘉（房陵）公主と淫亂し、堦の寶奉節（二の24寶琮の條の系圖(2)参照）に殺された。この一族はのち則天武后の時まで榮え、一家の内、駙馬（皇帝の娘の婿）三人、王妃五人、三品以上の官二十餘人という盛族となった。

吏部侍郎 張銳

兩唐書に傳なく、嚴表^{五四}では、唐會要^{五七}を引用して、武德七年に吏部侍郎に在任していたことを考證しているが、他のことは不明である。

吏部侍郎 韓仲良 舊八 新一〇 附子瑗傳

舊傳によれば、父の紹は隋の太僕少卿とあるが、新上^{七三}宰相世系表には紹は仲良の兄とし、父は褒（北周少保）、祖父は演（北魏恒州刺史）としている。仲良は武德初め、大理少卿となり、郎楚之らと律令を定めた。吏部侍郎になったことは本傳には見えず、嚴表^{三四}では、金石萃編^{五〇}韓良（仲良は字）碑により、武德八年ごろ攝吏部侍郎になったことを考證している。同九年には陝東道大行臺戸部尙書に轉じている。貞觀中は刑部尙書・秦州都督府長史に至った。

戸部尙書 寶璉 舊一六 新九

系譜については系圖(2)寶氏（一一頁）を参照せられたい。祖父の善は北周の太僕、父の榮定は隋の右武侯・左右武衛の大將軍を歴任し、榮定の妻は隋の文帝の姉、安成長公主（舊一六は萬安公主とある）であるが、開皇六年に卒している（隋書九）。舊傳によれば、兄の抗（後述、侍中）は武德元年、將作大匠兼納言となった。璉は大業末に扶風太守となり、李淵が長安を平定した時、郡を以て歸投した。「歷禮部・民部二尙書」とあるが、禮部尙書は李淵が長安で擁立した隋の恭帝より任命されたものである。武德元年六月一日に民部尙書となった。民部尙書はのち太宗世民の諱を避けて戸部尙書と改められた。ついで薛仁果を平げ、また益州に鎮した時、皇甫無逸（後述、戸部尙書）と合わず、無逸の奏により免官さ

れたが、まもなく祕書監を拜した。貞觀初め、太子詹事をへて將作大匠となり、洛陽宮を修葺し、華美に過ぎて免官せられた。しかしその娘は璉王元亨（高祖第八子）の妃となり、復位して右光祿大夫を加えられて、貞觀七年卒した。璉はまた音律に通じ、正聲雅樂を定め、その撰した「正聲調」一卷は世に行われた。

戸部尚書 劉文靜（前述二の(2)）

戸部尚書 鄭善果 舊六 新一〇

舊傳によれば、祖父の孝穆は西魏の少司空・岐州刺史に至った。父の誠は北周の大將軍で、大象初め、尉遲回を討つて戦死した。善果は父の戦死により、その官職を襲ぎ、隋の開皇初め、沂州刺史を拜し、大業中には魯郡太守になったが、煬帝は考天下第一とした。再遷して大理卿に至り、煬帝に従つて江都に至り、宇文文化及の煬帝弑逆ののち、その民部尚書となった。化及に従つて北上し、淮安王神通（系圖(3)唐宗室略系、一八頁參照）に捕えられて長安に送られ、李淵は之を遇すること甚だ厚く、太子左庶子・檢校内史侍郎を拜した。まもなく檢校大理卿・兼民部尚書となった。嚴表^{六二}では、それを武德二年冬としている。ついで事に坐して免ぜられたが、山東平ぎ、山東招撫大使となったが、選舉不平で除名された。のち禮部・刑部二尚書を歴任し、貞觀元年、岐州刺史となり、また公事を以て免ぜられたが、同三年復官して江州刺史となって卒した。

戸部尚書 皇甫無逸 舊六 新九

舊傳によれば、皇甫無逸の父の誕は、隋の并州總管府司馬であつたが、漢王諒の叛亂の時殺された。無逸は煬帝の時、洛陽太守となつて能名があり、右武衛將軍に遷つた。煬帝が江都で弑逆された時、洛陽留守であつた。洛陽で越王侗擁立の時逃れ、李淵は隋代の舊臣を以て尊禮し、刑部尚書とした（通鑑、武德元年七月己巳の條）。ついで陝東道行臺民部尚書を歴て、御史大夫に至つた。ついで益部を巡撫し、この時竇璉（前述）と協わなかつた。ついで民部尚書となつた。

嚴表^{六二}は武德五・六年のこととしている。ついで益州大都府長史に轉じ、母の疾篤き時、太宗は無逸を召したが、道中

で卒した。

戸部尙書 于筠 舊一三附曾孫邵傳

新唐書^{七二}宰相世系表によれば、祖父は于謹(周書^{一五})で、李淵の祖父李虎、李淵の母の父獨孤信らと共に北周最大の門閥の八柱國の一人である。この于氏は北朝胡姓考(五四頁)によれば、胡姓の「萬忸于氏」の改められたものであるという。筠の父の翼は隋の太尉であった。舊一三于邵は、筠の曾孫にあたり、その傳に「曾祖筠戸部尙書」とあるにより、嚴表^{六二}ではこれを武德中のことと推定した。筠の他の事蹟は不明である。

戸部侍郎 獨孤義順(前述、左丞)

禮部尙書 李綱 舊二 新九

舊傳によれば、李綱の祖父の元則は北魏の清河太守、父の制は北周の車騎大將軍であった。綱は北周の齊王憲(周書^{二一})に仕え、憲が害されんとした時、敢然として擁護した。隋の開皇末に、太子勇に仕え、その廢された時も無實を述べ、ために左右が色を失った。文帝その態度を賞め、尙書右丞に拔擢した。しかし時の大官、楊素らと合わず、行軍司馬となつて林邑(南ベトナム)を征したが、歸還後も好遇されなかつた。大業末には、賊帥何潘仁の長史となつていた。李淵が長安に入った時謁見し、「丞相府司錄・專掌選」となつた。武德元年六月一日に、通鑑は「禮部尙書參掌選事」とあり、舊傳は「高祖踐祚。拜禮部尙書。兼太子詹事。典選如故。」とあり、吏部尙書の所でも觸れたが、李綱は丞相府司錄で、專掌選であつたが、唐朝創業後も禮部尙書になり、そのまま吏部尙書のことも兼ねたのである。その後もしばしば上言して嘉納せられた。武德二年、老を以て辭職を請い、禮部尙書を解かれ、太子少保はそのままとなり、隋代の名臣として優禮を加えられた。貞觀四年に太子少師を拜し、太宗は綱が脚疾があるにも拘らず歩輿を賜つて禁中に召し、政道を問うた。貞觀五年、年八十五にて卒した。

禮部尙書 唐儉(前述二の(7))・鄭善果(前述・戸部尙書)

禮部侍郎 韋義節

新唐書^{七四} 宰相世系表の韋氏鄭公房の條によれば、父の壽（北史^{七四}）は隋の毛州刺史（北史では恒・尾二州刺史）であり、祖父の孝寬は西魏北周の大官として著名である（周書^{一三}）。壽の娘は煬帝の妃となっている。義節は兩唐書に本傳なく、通鑑によれば、武德元年六月一日、相國府屬から禮部侍郎となった。また通鑑の武德元年九月の條に、「虞州刺史韋節。攻隋河東通守堯君素。久不下。軍數不利。壬子。以工部尚書獨孤懷恩代之。」とあり、武德元年九月には、虞州刺史に轉じている。嚴表^{一〇九}では、義節が貞觀初め、刑部侍郎になったことを推定しているが、確證はない。

兵部尚書 屈突通 舊五 新八

舊傳によれば、父の長卿は北周の邛州刺史であった。屈突通は隋の開皇中に親衛大都督より、右武侯車騎將軍となり、奉公正直であった。大業中は、左驍衛大將軍・關内討捕大使となつて、賊を討伐した。李淵起義し、長安に進撃中、屈突通は之を迎撃したが、敗れ捕えられて長安の李淵の下に送られた。李淵は通を隋室の忠臣として釋し、武德元年六月一日、兵部尚書とした。世民に従つて薛舉を平げ、本官を以て判陝東道行臺僕射となった。また世民に従つて、王世充・竇建德を討ち、功第一となり、陝東大行臺右僕射となり、洛陽に鎮し、數歳で刑部尚書となった（嚴表^{九七}では武德七・八年と推定）。しかし「文法を習わざるを以て」（法律に通じないの意）固辭して、工部尚書に轉じた。玄武門の變の時、檢校行臺僕射として洛陽に鎮した。貞觀元年、洛州都督となり、翌年、年七十二で卒した。

兵部尚書 任瓌 舊五 新九

舊傳によれば、任瓌は南朝陳の鎮東大將軍蠻奴の弟の子で、父の七寶は陳の定遠太守であった。瓌も陳に仕え、隋師の來た時、陳の子孫を立てて帝となさんとしたが用いられなかつた。隋の仁壽中には、韓城尉となつたが、俄に職を罷められた。やがて李淵に謁し、河東縣戶曹となつた。李淵起義し、留守永豐倉等となり、李淵即位し、穀州刺史となつた。世民に従つて王世充を平げ、河南道安撫大使となつた。また徐圓朗を平げ（武德六年）、徐州總管となり、輔公祐を平げ（武

德七年)、邢州都督となった。玄武門の變の時、弟瓌のことで坐して通州都督に左遷され、貞觀三年に卒した。嚴表八九七では、朝野僉載三により、武德八・九年に兵部尙書になったことを考證している。

兵部侍郎 趙慈景

新三諸公主列傳に、「長廣公主(高祖李淵の娘)始封桂陽。下嫁趙慈景。慈景隴西人。帝美其姿制。故妻之。……帝平京師。引拜開化郡公。爲相國府文學。進兵部侍郎。爲華州刺史。討堯君素戰死。」とあり、通鑑は武德元年六月一日に、「(相國府)屬趙慈景爲兵部侍郎。」とあり、相國府文學と相國府屬と合わない。趙慈景は唐朝創業前に李淵の婿となつていた。堯君素に敗れたのは、武德元年十一月癸丑(通鑑)のことであるから、それ以前に華州刺史になっている。長廣公主は武德元年十一月、趙慈景戦死後、楊師道(前述、吏部尙書)に再嫁した。

刑部尙書 蕭造

蕭造は、李淵が太原より長安へ進撃中の大業十三年九月丙辰に「馮翊太守蕭造以郡來降。」(舊紀)とあり、また義寧二年(武德元年)五月甲子、李淵即位の時、「命刑部尙書蕭造兼太尉。告於南郊。」(舊紀)とあり、武德元年七月丙午の條に「刑部尙書蕭造爲太子太保。」とあり、隋の馮翊太守で李淵に來降し、隋の恭帝より刑部尙書に任ぜられ、唐朝創業後もそのまま留任し、その年の七月丙午に太子太保に遷った。兩唐書に列傳なく、詳細は不明である。

刑部尙書 皇甫無逸(前述、戸部尙書)

刑部尙書 竇誕 舊一 新五

系譜については、前掲系圖(2)竇氏(一一頁)を参照せられたい。舊傳によれば、抗の第三子で、隋の仁壽中に、朝請郎となった。李淵長安に入り、辟せられて丞相府祭酒になり、唐朝創業後、殿中監になり、高祖李淵の娘の襄陽公主に尙した。世民に従つて、薛舉を征し、元帥府司馬となり、刑部尙書に遷った。嚴表九七五では、これを武德二・三年のこととしている。つづいて太常卿・梁州都督となり、貞觀初めに、右領軍大將軍、ついで大理卿・殿中監・宗正卿を歴任して卒し

た。

刑部尚書 劉政會（前述二の(4)）

刑部尚書 沈叔安

兩唐書に列傳はないが、嚴表^{九七}では、舊^{一九}高麗傳により、武德七年以前に刑部尚書になったことを考證した。その他のこと不明である。

刑部尚書 屈突通（前述、兵部尚書）・鄭善果（前述、戸部尚書）

刑部侍郎 李瑗 舊^{〇六} 新^{七八}

唐の宗室である。系譜については系圖(3)唐宗室略系（一八頁）を参照せられたい。嚴表^{〇九}において「兩書無傳」と言うのは誤りである。しかし通鑑の武德元年六月一日の「黃臺公瑗爲刑部侍郎。」は獨特の記事で、本傳中には見えない。舊紀の武德元年十月壬申朔の條に「黃臺公瑗爲盧江王。」とあり、舊^{〇六}・新^{七八}の盧江王瑗と黃臺公瑗が同一人物であることは間違いない。また新唐書^{七〇}上 宗室世系表では、父の哲を黃臺縣男とし、黃臺公は父の襲爵である。舊傳によれば、唐朝への歸投の經過は不明で、武德元年に信州總管となったとあり、これは通鑑の武德元年七月戊辰の條に「遣黃臺公瑗安撫山南」と同一のことを指していると思われる。この時、刑部侍郎も免ぜられたと見るべきであろう。武德九年に幽州大都督に遷った。玄武門の變の時、建成に結び、王君廓に殺された。年四十一であった。

刑部侍郎 李叔良 舊^{〇六} 新^{七八}

唐の宗室で、系譜については系圖(3)唐宗室略系を参照せられたい。舊傳によれば、父の禕は隋の上儀同三司であった。叔良は義寧中に左光祿大夫・長平郡公となり、武德元年、刑部侍郎・長平王となった。辭舉を討って、官軍は敗績したが、叔良の鎮した涇州は全きを得た。武德四年、突厥入寇の時、流矢に中って薨じた。

刑部侍郎 劉德威 舊^七 新^{一〇}

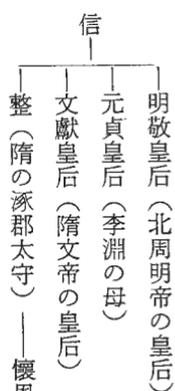
舊傳によれば、父の子將は隋の毗陵通守とあるが、新七一宰相世系表では、父は通、字は子將（隋毗陵郡通守）、祖父は軫（北齊高平太守）とある。徳威は隋では裴仁基に従って賊を討っていたが、仁基と共に李密に歸降し、武徳元年、李密に従って唐朝に歸降し、左武侯將軍を授けられた。劉武周を討って敗れ、捕虜となったが逃れ歸り、檢校大理少卿となつた。竇建徳・王世充の平定に功あり、刑部侍郎となつた。嚴表一〇は「武徳中。四年稍後」と言う。散騎常侍を加えられ、平壽縣主を妻とした。貞觀初め、大理・太僕二卿、ついで絳州刺史・檢校益州大都督府長史となり、同十一年に再び大理卿、數歳にして刑部尚書・檢校雍州別駕、同十八年、遂州刺史、三遷して同州刺史になり、高宗の永徽三年、年七十で卒した。

刑部侍郎 李琛 舊六 新七

唐の宗室である。系譜については系圖(3)唐宗室略系を参照せられたい。祖父の蔚は北周の朔州總管、父の安は隋の領軍大將軍であつた。琛は義寧中に襄武郡公となり、突厥始畢可汗に使用して和親を結んで歸つた。李淵大いに喜び、刑部侍郎とした。武徳初年のことであろう。嚴表は未載である。ついで襄武王となり、蒲・絳二州總管を歴て、宋金剛の攻めて來た時、濕州總管となり之を鎮め、武徳三年薨じた。

工部尚書 獨孤懷恩 舊一八 新二〇

系圖(5)獨孤氏



北史一六獨孤信傳によると、系圖は上の如くなる。獨孤信は、李淵の祖父李虎、李密の曾祖父李弼、于筠（戸部尚書）の祖父于謹らと共に西魏・北周の八柱國という最高門閥の地位にあり、その娘は三朝の皇后（うち唐は嚴密には皇帝の母）になつた。なお新傳に懷恩を元貞皇后の弟とするのは誤りである。舊傳によれば、懷恩は幼時皇后の姪として隋の宮

中に養われ、後仕えて鄆縣令となつた。李淵長安を平定し、長安令を授けた。在職中嚴明で、甚だ時譽を得た。李淵帝位

に即き、武徳元年六月一日、工部尙書を拜した。時に韋義節（前述、禮部侍郎）が堯君素を撃つて破れ、懷恩は之に代つたが、戦況好轉せず、高祖より責められ、これより怨望した。また呂崇茂を攻め、崇茂は救を宋金剛に求め、金剛攻め來り、懷恩は捕虜となり、一旦逃歸したが、反狀露見し、武徳三年二月庚子、誅に伏した（舊紀）。時に年三十六、その家は籍沒された。そのためかこの獨孤氏は北朝の名門でありながらその後史料にほとんど現われない。

工部尙書 武士彠（前述二の(11)・屈突通（前述、兵部尙書）

工部侍郎 溫大雅（前述、二の(8)）

工部侍郎 元務眞

兩唐書に傳なく、嚴表一〇では、元和姓纂四を引き、武徳、或は貞觀中に工部侍郎になったと考證している。姓纂によると、務眞の父の行恕は隋の毛州司馬であった。

(三) 門下省

納言 劉文靜（前述二の(2)）

納言 竇抗 舊六 新九
一 五

竇抗は竇璡（前述、戸部尙書）の兄である（系譜は系圖(2)竇氏、一一頁参照）。舊傳によれば、抗は隋朝では、母が文帝の姉であったので、崇寵せられ、千牛備身・儀同三司・梁州・岐州刺史をへて、幽州總管となった。時に漢王諒の叛亂に坐して除名された。李淵とは幼時より親交あり、李淵が弘化留守の時、淵に蹶起を勧めた。李淵が長安を平定した時歸投し、將作大匠となり、武徳元年、本官を以て兼納言となった。高祖李淵は、つねに兄と呼び、宮内は舅と稱した。常に高祖の遊宴に陪侍し、朝務には預からなかった。ついで左武侯大將軍・領左右千牛備身大將軍となり、世民に従つて、薛舉を平げ、勳第一となり、また王世充を征したが、武徳四年に侍宴のとき暴卒した。

侍中 陳叔達 陳書二 舊一 新一〇

舊傳によれば、陳叔達は南朝陳宣帝第十六子（陳書は第十七子）で、陳の義陽王に封ぜられ、侍中・丹陽尹・都官尚書を歴任した。隋に入り、大業中に内史舍人、出でて絳郡通守の時、李淵の長安に向う軍が通過し、この時、郡を以て歸降し、丞相府主簿となり、記室の温大雅と機密を掌り、赦令、禪代の文詔は多く叔達の手になった。武徳元年に黃門侍郎、同二年に兼納言、同四年に侍中（武徳三年三月に納言を侍中と改名）を拜した。「江南名士。薄遊長安者。多爲薦拔。」（舊傳）とあり、舊南朝系の者の唐朝への窓口を勤めた。貞觀年間になると、同じく南朝系の蕭瑀（前述、右僕射）と天子の面前で争つて免官された。のち禮部尚書を拜し、貞觀九年に卒した。

納言 楊恭仁（前述、吏部尚書）

侍中 裴矩 隋書七 舊六 新一〇

裴矩の家系のことは矢野主税氏の「唐初の貴族政治について」（東方學第九輯）に詳しい。舊傳によれば、祖父の他は北魏の東荊州刺史、父の訥之は北齊の太子舍人であった。矩は北齊の高平王文學に起家し、北齊亡び、楊堅（隋の文帝）が定州總官の時、その記室となった。隋の文帝即位後、給事郎・直内史省となり、陳が平ぎ、吏部侍郎となった。大業中には、西域のことに當つた。煬帝の高句麗遠征にも從軍し、高句麗に亡入した斛斯政に代つて兵部侍郎のことを掌つた。のち江都に行き、宇文文化及の煬帝弑逆後、その尚書右僕射となり、化及敗れ、竇建徳の尚書右僕射となった。建徳敗れ、建徳の妻と傳國璽を以て、山東の地を擧げて唐に降つた。武徳五年に太子左庶子を拜し、ついで太子詹事に遷り、同八年に兼檢校侍中となった。玄武門の變の後、民部尚書に遷つた。貞觀元年、年八十で卒した。

侍中 宇文士及 舊六 新一〇

士及は煬帝を弑した化及の弟で、士及の父は述（隋書一六）で、隋の名將である。祖父の盛は北周の上柱國であつた。その家は北周の宇文氏とは異り、新下^{七一}宰相世系表には、もと「費也頭氏」と言い、代々沃野鎮の軍主であつたとある。舊傳によれば、士及は煬帝の娘の南陽公主に尙した。大業中に尙鞏奉御で、煬帝に從つて江都に行き、のち鴻臚少卿となつ

た。化及は土及が煬帝の婿なので之を忌んでいたが、煬帝弑逆後は内史令となっていた。土及は李淵の殿内少監であった時から仲がよかった。のち封倫と共に李淵の下に來降した。また土及の妹は高祖李淵の昭儀（妃の稱號）となっており、この點からも親待せられた。世民に従って宋金剛を平げ、また王世充・竇建德を討ち平げ、中書侍郎に遷り、武徳八年、權檢校侍中・兼太子詹事となった（新傳）。太宗即位し、中書令・殿中監・蒲州刺史・右衛大將軍を歴任し、貞觀十六年卒した。

黃門侍郎 陳叔達（前述、侍中）

黃門侍郎 崔民幹

前掲通鑑に「博陵崔民幹爲黃門侍郎。」とあり、崔民幹だけは貫籍が博陵と明示されている。崔民幹については兩唐書に列傳がないが、新唐書^{七二}下 宰相世系表には、博陵安平の崔氏の第二房崔氏の中にあり、この人のみは唐朝創業期の人物中稀な山東漢人の名門、博陵安平の崔氏の出身である。祖父の猷は隋の大將軍、父の叔重は隋の虞部侍郎であった。なお宰相世系表には、民幹とはなく、幹とあるが、太守世民の諱により民字を削除したものであろう。また崔民幹は貞觀氏族志の初進の時、第一等にあつたが、太宗の命により第三等とされたのは有名な話である（舊^{五六}高士廉傳）。いわゆる門閥によつて第すれば、第一等の家柄であつた。

崔民幹の唐朝歸投前のことは不明である。武徳元年六月一日に、黃門侍郎に起用されたことは、門閥の代表格としてその對策のためであらうと推定される。同年十月庚辰に、淮安王神通（系圖③唐宗室略系參照）が山東道安撫大使となつたが、民幹はその下で副使となつた。山東の門閥對策の第一線に出たわけである。しかしその成果は不明であるが、列傳もないことはむしろ不成功を物語っているようであり、また貞觀十二年の貞觀氏族志の完成の時まで黃門侍郎で昇任のないことも、このことを裏書きしているようである。貞觀氏族志で第三等に下げられたのは、家柄だけでなく唐朝への貢獻度の低かつたことも考慮に入れて解してよからう。

なお高祖の娘の眞定公主（新八）が崔恭禮に嫁しているが、恭禮は民幹と同じく博陵安平崔氏第二房で（新七）宰相世系表）、婚姻關係を通じてここに門閥對策を行ったことがうかがわれる。

黃門侍郎 溫大雅（前述、二の⑧）・唐儉（前述、二の⑦）・楊恭仁（前述、吏部尙書）

黃門侍郎 蕭璟 舊六
三

蕭璟は蕭瑀（前述、右僕射）の兄で、舊傳（蕭瑀附傳）に「瑀兄璟。亦有學行。武德中。爲黃門侍郎。累轉祕書監。封蘭陵縣公。貞觀中卒」とある。

四 中書省

內史令 竇威 舊六
新九

系譜について、系圖②竇氏、一一頁を参照せられたい。舊傳によれば、竇威の父、熾は隋の太傅であつた。威は尙武の家に在つて文史を耽翫し、書癡と言われた。隋朝で秀異射策甲科に擧げられ、祕書郎を拜し、以後十餘年祕書省に在つた。のち蜀王秀の記室となつたが、秀の行事に不法が多かつたので、疾と稱して田里に還つた。大業四年に內史舍人に遷つたが、旨に忤い、考功郎中に轉じ、事に坐して免ぜられ、長安に歸つてゐた。時に李淵が長安に進撃し來り、召して大丞相府司錄參軍となり、舊儀・朝章・國典を定め、禪代の文翰に多く參預した。武德元年六月一日、內史令となつた。高祖李淵の竇威に曰つた言葉に「比よごろ見るに、關東の人、崔・盧と婚を爲し、猶お自ら矜伐す。公代帝戚よとなる。また貴からずや。」とある。關東の門閥と唐朝の支配集團との差異がはっきり示されている。唐朝創業後まもなく武德元年六月辛丑に薨じた（舊紀）。

內史令 蕭瑀（前述、右僕射）

中書令 封倫（前述、吏部尙書）・楊恭仁（前述、吏部尙書）

中書侍郎 唐儉（前述、二の⑦）

中書侍郎 溫彥博 舊一 新九

溫彥博は溫大雅（二の(8)）の弟である。舊傳によれば、開皇末に秦孝王俊の推薦で、文林郎・直内史省・通直謁者となった。大業末には、羅藝の司馬となり、羅藝と共に唐朝に歸投し、幽州總管府長史から、中書舍人・中書侍郎となった。突厥入寇の時、并州道行軍總管長史となって戦い、捕虜となった。太宗即位後歸還し、雍州治中・檢校吏部侍郎となった。また中書侍郎兼太子右庶子を拜し、貞觀二年、御史大夫・檢校中書侍郎、同四年、中書令、同十年、尚書右僕射となり、明年、年六十四で薨じた。

内史侍郎 溫大有（前述、二の(9)）・鄭善果（前述、戸部尚書）・封倫（前述、吏部尚書）

以上は武德時代（高祖朝）に三省六部の長官次官に任命せられた人の祖父・父の仕えた王朝および官職、本人の隋官、唐朝への歸投の経過、唐朝創業時、およびそれ以後の官職を概観したもので、これを表示したのが「表(二)武德時大官父祖の官職表」(三四頁)である。

この合計四十五名中、本人の隋官、および父・祖の官職不明の四名（趙慈景・裴晞・張銳・沈叔安）を除き、四十一名のうち二十七名は本人の隋官が判明しており、本人の隋官が判明しない残りの十四名は父の北齊・北周・隋（ほかに後梁二名、陳二名あり）の官が判明しており、唐朝創業期（武德時代）の三省六部の長官・次官の四十五名は、不明の四名と南朝系の四名を除き、すべて本人もしくは父が隋・北周・北齊の官にあったのである。これは隋唐交替期の特徴をはっきり示しており、唐朝の中核を構成した人（三省六部の長官次官）には、隋的もしくは北朝的な官僚と同質であり、そこに新しい階層の導入は見られないということである。しかし唐朝は長安を中心に成立したので、當時江都・洛陽その他諸叛亂集團に分散していた隋朝の舊大官は唐朝には入らなかったことは注意すべきであろう。この點を補ったのが、煬帝弒逆後、江都宇文化及の下で官に就いた煬帝屬従の人々（封倫・楊恭仁・鄭善果・裴矩・宇文士及）である。

以上のような點を漢朝成立期の劉邦（高祖）の功臣であった丞相の陳平がまったくの庶民の出身であり（史記五六）、相國

の樊噲が犬殺し（屠狗）より起り（史記五）、太尉の周勃がもと葬式の笛吹き（吹簫給喪事）であり（史記七）、丞相の灌嬰が絹賣り（販繪者）より起った（史記九）ように、いかにも庶民が多く漢初の大官に入りこんでいるのに對し、唐朝の文官層は自身が隋官の経験があるか、または父祖が隋官の経験のあることは、北朝以來の支配層の固定化の現象として注目しなければならぬ。隋唐の間には隋末の叛亂期をささむが、それを經て成立した唐朝であるにも拘らず、隋朝と支配層の變化が見られないことが、隋唐交替期の特徴である。しかしこれを貴族とか豪族と言ってしまうたり、經濟的背景から地主出身と言ってしまうと、それはかえって一般化されてしまつて歴史の範疇でなくなつてしまふと思ふ。私は隋末の叛亂期にも根底から動搖しなかつた強固な支配集團の存在が北朝とくに北周・隋・唐と繼承された事實をこの時期の特色と見たのである。

四　　む　　す　　び　　—　　唐朝創業期の性格

前稿「李淵集團の構造」において、私は李淵の太原起義時における性格を、その大將軍府の構成を通じてみたのであるが、本稿においては、まずこの李淵集團幹部の人々が、唐朝創業後、唐朝にあつてどのような官歴を示したかを追跡した。その結果、大將軍府本部の文官である長史・司馬・掾・屬・各參軍の職にあつた者は、おおむね唐朝官制の中核である三省六部の長官・次官に進み、大將軍府の武官である左右領大都督府下の統軍などは、たいてい唐朝の大將軍・將軍に進んで、唐朝軍事面第一線の最高指揮官の職についた。これらの事實は、李淵集團が唐朝設立の時の中核であつただけでなく、唐朝創業後も唐朝の文武にわたる中樞を占めたことを示しており、李淵集團が擴大されて唐朝にもちこまれていくことは認められると思ふ。

しかしこれも高祖朝においてで、太宗の時代になると李淵集團出身者で在任する人も地方官が多く、ここに唐朝の一轉機が認められることは次稿にて述べる。しかしまた唐朝の律令制に基づく膨大な官制は李淵集團出身の人々以外にもお

はなく、そのルートを経ない者は唐朝の中核をなす官制に入り得なかったと断言してもよい位である。このことを私は北朝以來、官僚の層の固定化の事實と見たいのである。隋末の動亂期を經過した後の唐朝の創業には官僚の層にほとんど變化の見られないことに注目したい。これこそこの時期の性格に關心のある者の見逃してはならない事實と思う。

しかしこのような事實も、その唐朝への歸投狀況から見ると、李淵集團は太原において起義した關係で、太原附近の文武の地方官が多いのは當然であるが、武徳元年六月一日附任命の諸官を見ると、李氏一族・姻籍關係を除くと、李淵集團と、その太原進發後、長安への進撃途中に投降した隋の地方官が主で、その他では、當時賊帥何潘仁の長史であったかつての隋の名官、李綱、山東門閥對策に起用された名門博陵の崔氏出身の崔民幹、北周の名官、韋韋寬の孫の韋義節のほか目新たらしい人物は見當らず、その他の隋の大官の歸降はなかった。これは煬帝朝において、政治の中心は長安より東都洛陽に移り、さらに煬帝の晩年は南方の江都に別個の政府を作っており、叛亂の賊帥はそれぞれ官僚機構を作っていた當時の隋朝の分裂の體勢を念頭において考えねばならないが、唐朝の創業時においては、いまだ一地方政權的であつたことは事實であろう。このことを打破るためには一方には東都平定という大事業の完成がなければならぬが、一方上級官僚の人材の不足を補う目標が、煬帝弒逆後の宇文化及の下にあつた舊煬帝下の人々に向けられていたことが言える。封倫・楊恭仁・鄭善果・裴矩・宇文士及らの唐朝起用がそれである。それらの人々の唐朝歸投の經過は、先述の如く、まぢまぢであるが、この系統の人達が多く三省六部の長官・次官に順調に昇進したことは、その眞の唐朝への功獻度はともかく、結局唐朝は舊煬帝下の大官を受け入れることによつて、一面では人材の不足を補い、一面では煬帝下の舊隋的な體制を實質上唐朝にもちこんでいることを天下に周知させ、保守的な觀點からの安堵感を民衆に與えようとしたことも考えてよいであろう。しかしこのことは別の面から見ると、東都洛陽を中心とする王世充側が、隋の越王侗（皇泰主）を擁して唐朝に頑強に抵抗し、武徳四年の洛陽平定まで東都側と妥協ができなかったことも考慮に入れておいてよいであろう。

なお次に南朝系官僚の動向についてであるが、私の舊稿「唐初の貴族」（二五頁）においては、唐初の宰相を(一)北朝

〔鮮〕は「朝」の誤植〕系漢人官僚の家柄、(二)北朝系蠻族官僚の家柄、(三)南朝系統の家柄、(四)家柄のないもの、の四つに分類した。このうち(一)(二)の民族的な區別は兩者混淆しており、決定的な區別は唐朝ではあまり意味がなく、(一)(二)を合して北朝的とくに北周的な點が重要である。(三)の南朝系については、これを獨立させて考へていたことはここでははっきりと修正しておきたい。蕭瑀・蕭瑋のきょうだいが隋の煬帝の蕭皇后であり、その父・祖父の屬した後梁(「唐初の貴族」(二六頁)に「梁」とあるのは「後梁」の誤り)はすでに北周・隋の傀儡政權で、血は南朝梁の帝室の系統であることは事實であつても、すでに父祖の時より北朝に降服した俘虜的な家柄である。このことは陳叔達についても同じで、隋の絳郡通守として唐朝に歸降しており、これも隋官の投降の形體で、堂々と南朝の系統を代表して唐朝に参加しているのではなく、隋朝より引續いて唐朝に仕えたに過ぎない。勿論そこには舊南朝皇帝の子孫が唐朝の大官として奉仕していることによつて、舊南朝治下の人々(すでに南朝最後の陳滅亡より唐朝創業までは約三十年たつてゐる。五八九―六一八年)に安心感を與へていたことは或る程度認めてもよいが、南朝系のものを獨立して堂々と唐朝の中の一勢力として持ちこむ考へはここに訂正しておきたい。

また唐朝の山東門閥對策は、先にも觸れたが、唐朝創業期にあつては重大な問題と考へられた。これには博陵安平の第二房崔氏の崔民幹を通じて乗り出した。このことは崔民幹が淮安王神通の下で山東安撫副使となつたことによつて示されている。しかし崔民幹には兩唐書に列傳がなく、その活躍成功の記事もなく、しかも武徳元年より、貞觀氏族志の編纂された貞觀十二年まで約二十年間に黃門侍郎以外の官に遷つた史料も見えない。崔民幹の家を貞觀氏族志において第一等とすることに太宗が反對したことは、單に家柄の格附けの當否よりも、崔民幹に對する唐朝の空氣がよくなかつたことが觀取される。すでに山東の門閥は、崔民幹を除いては、唐朝官界の中樞である三省六部の長官・次官からは完全に締め出されていたのである。しかしまた唐の高祖は崔民幹のほかに、同じく博陵安平第二房崔氏の崔恭禮に自分の娘の眞定公主を降嫁させてゐる(新八・新七二宰相世系表)ことは、執拗にこの崔氏を通じて山東門閥との妥協をはかつたことを示して

いる。しかし、上述の如く、崔民幹の本傳さえも兩唐書に残っていないことはその成功を示しているとは考えられない。またそれにも拘らずその後の唐朝の繁榮は、すでに門閥對策が王朝の重要な關鍵でなくなつたと見るべきであろう。以上の私の考察は、唐朝創業期の性格を單に人的構成の面のみより追求し、その經濟的背景については何も觸れていない。唐朝の經濟的背景の研究としては、均田制の研究がその一つの方法である。これについては戰前より諸家によって、その田制關係の法令と、施行の實態と見られる敦煌文書を史料として多くの研究が現われた。また最近では吐魯番文書を史料とする研究が盛んであるが、敦煌・吐魯番の地は、唐朝の中心を去ること遠く、地理的な環境も内地とは異つており、これらの文書では、唐朝の土地行政の普遍的形態と、これらの地域の特殊的形態との辨別が困難で、その點はとくに吐魯番文書に甚しい。そのために均田制に關する一連の研究も、唐朝成立の基盤の探求には、理念的には正しいとしても、史料面の制約から隔靴搔痒の感があつた。また、最近中國において盛行している唐初政權の性格を、世族的大官僚地主と、新興庶族地主の關係から分析してゆく方法も（齊陳駿「試論隋和唐初的政權」歴史研究一九六五年第一期、梁森泰「關於唐初政權性質的幾個問題」歴史研究一九六五年第六期など）、理念的にはともかく、實證的には、世族と庶族の區分が曖昧で、これのみによって唐初政權の性格が一擧に解明できるとは思えない。また唐朝創業の理念の追求も必要であつて、これを私は律令制の確立に求めたいと思つているが、これは別稿に譲ることとする。

要するに本稿の目的は、唐朝創業期の人的構成を通じて、その性格の解明にあつた。この方面の研究としては、陳寅恪氏の「唐代政治史述論稿」に見られる「關隴集團」説が廣く學界に知られている。私は陳寅恪氏とは別に「唐初の貴族」の視點を擴大修正して本稿とした。その結果を簡単にまとめて表現するならば、唐朝創業期の大官は自ら隋官の経験があるか、無い者は父祖が隋あるいは北朝の官僚の家柄の出であることである。唐朝創業期の政治體制はとくに上層部においては唐的新興階層がまったく存在しないことである。隋唐の間には二百にもほる叛亂集團の蜂起があつたが、これは支配集團には影響はほとんどなく、北朝とくに北周以來の支配集團の固定化が特徴である。北周の門閥八柱國のうち、唐室李

氏、獨孤氏（懷恩）、于氏（于筠）の三家が唐朝創業期の高官に現われるのもこのことを象徴的に示している。このことは秦漢交替期の庶民の高官への進出とははっきり違った社會情勢である。

しかし一面においては、隋末の叛亂期の唐朝への影響をまったく無視することも正しくはない。李淵集團中の錢九隴・樊興が唐室李家の隸人から唐朝の大將軍へ榮進したことは、例外的ではあるにしても、はげしい戦闘が身分關係を緩和し、身分にとられない登用が李淵集團の戦闘力を強固にしていたことなどは考慮を忘れてはならない點であろう。

以上は主として唐の高祖李淵の武德期に對する考察を試みたが、世民は武德九年六月四日、兄の建成、弟の元吉を殺した玄武門の變を経て即位し、「貞觀の治」とよばれる盛世を現出した。この貞觀の治の背景が武德期のそれとはどう違ってくるかということが私の次の課題であるし、「唐初の貴族」の補正も當然それに繼續される。（昭和四一・四・一〇）

註

- ① 激動されたものとしては、中山八郎氏の「中國中世經濟史」（東京商科大学一橋新聞部編「經濟學研究の棗4東洋經濟史編」（昭和二五年春秋社刊）と、Prof. E. Stuart Kirby: Introduction to the economic history of China, Basic Problem of Tang Dynastyがあり、批判としては、矢野主税氏の「唐初の貴族政治について」（東方學第九輯、昭和二九年一〇月）がある。
- ② この日附を、新舊唐書本紀はいずれも十二月癸未（七日）のこととしているが、「通鑑考異」に従って、「大唐創業起居注」二に依り、十一月丙寅のこととする。
- ③ 「李淵集團の構造」三九頁の表四李淵集團幹部父祖の官職の溫大雅の條の祖父の欄に、新唐書72中宰相世系表により、名
- ④ 「裕」、王朝、「北魏」、官職、「太中大夫」を補う。
郭沫若「武則天」（一九六二年北京新華書店）附錄二、關于武后七則内に、「利州都督府皇澤寺唐則天皇后武氏新廟記」により、武士護の利州都督就任は再度あり、初任は武德七年、再任は貞觀初年としている。なお「李淵集團」表四に、武士護の父祖のことが脱落した。新唐書七四上、宰相世系表には、祖父の儉が北周の永昌王諮議參軍、父の華は隋の東都丞とある。
- ⑤ 新唐書50兵志に「隋制十二衛。曰翊衛。曰驍騎衛。曰武衛。曰屯衛。曰禦衛。曰候衛。爲左右。皆有將軍以分統諸府之兵」とあり、將軍は大將軍に作るべきである。また驍騎衛と驍衛とは同じものと考えてよい。（參看、唐長孺「唐書兵志箋正」1頁）

⑥ 隋代の左右衛に属する特別禁衛隊に親衛・勳衛・翊衛の三衛があり、右勳衛は右衛に属する右勳衛の名稱が改められたものである（拙稿「隋末の叛亂期における李密の動向」（史學雜誌74—10、9頁参照）

⑦ 内藤乾吉氏の「唐の三省」（中國法制史考證、有斐閣刊所收）には三省の機能がよく説かれてある。ただし門下省が貴族を代表しているという見方には異見をもっている。

⑧ 隋室楊氏の系譜については拙稿「楊玄感の叛亂」（立命館文學二二六號）一三頁参照。

⑨ 李密については、拙稿「隋末の叛亂期における李密の動向」参照。

⑩ 新唐書72下宰相世系表において、崔民幹と崔恭禮の關係を圖示すると次の如くなる。

珉——經——辯——楷——士謙——曠——礎——恭禮
 儔——挺——孝芬——猷——叔重——民幹

【餘白録】「隋書卷一。高祖上。高祖文皇帝。姓楊氏。諱堅。弘農郡華陰人也。漢太尉震八代孫鉉。仕燕爲北平太守。鉉生元壽。後魏代爲武川鎮司馬。子孫因家焉。」私の隋唐史の講義はいつもこの隋室楊氏と、それに唐室李氏の出自から始めることにしていますが、これは實は恩師で今春山梨大學を定年退官された濱口重國博士が、私の東大二年生の時（昭和十七年）の「隋代史」の御講義の冒頭にならったものであります。それより早二十數年の星霜は流れ、先生も定年をお迎えになりましたが、今回濱口先生畢生の大著「唐代の賤人制度」が「東洋史研究叢刊」の一として、東洋史研究會から刊行されることになり京都に在住する關係から、私が東洋史研究會との連絡や、校正の補助をさせて戴くことになり、目下その初校が、私の机上に積まれています。

この御高著は、戦後先生が山梨大學の紀要に連年登載された賤人關係の論文を基に、近年とくに健康のすぐれない中を一千數百枚新たに書き下されたものであります。御病臥中の御執筆にも拘らず、周到な廣範圍にわたる綿密な史料の蒐集と、

タイナミックな雄大な史觀を展開された構成は、校正しながら読んでゆくにつれて、先生の肉體を超越された神鬼迫る氣概のこもった筆致に壓倒され、學問のきびしさとはこのようなものかと、ややもすると怠惰な心の起る今日のごころ、私の襟を正さしめるものがあります。唐代の賤人の各階層にわたり、まず律を中心し法的に叙述され、ついでその起源を求めて北朝へ、遠くは漢代にまでさかのぼってゆかれるあたり、ややもすると一王朝の平面的な研究の多い中において、文字通りの歴史的手法を遺憾なく驅使され、出版の暁には、斯界に警鐘を與える一大著述であろうと思ひます。

また濱口先生には、本會刊行のものとは別に、戦前御發表の論考を中心とした論文集「秦漢隋唐史の研究」（上下二卷）が近く東大出版會から出ると聞いています。この兩著はとくに隋唐史の研究者に大きな恩恵を與えるものと思ひますので、拙稿の餘白を埋めるよう編輯の方から依頼された機會を利用して載いて一言取急いで書きました。

（四一・六・二二・布目潮風）